

るわけだが、それまで地域で活動をされてきた、地域を知っている、そうした住民との信頼関係があるということではないかと思う。社会福祉協議会の構成メンバーを見れば、理事会、評議委員会から構成されるが、皆さんがその地域の住民の方である。住民の代表の方から構成された社会福祉協議会がその地域の復興に向けて支援をする、活動をするというのは当然のことだと思う。そういったことで、社会福祉協議会は、これからも地域福祉活動としてボランティアセンターの運営に携わっていかないといけないと思う。

行政との関わりも、これも非常に抜きにしては語れないと思う。日野町の場合は、支援物資の発注に関しては全部松田さんを通してやるということになったわけで、松田さんがあちこち動いたら、それだけで発注がとまってしまう。松田さんをここにひもをつけて置いとけというようなこともあったぐらいで、非常に一本の松田さんという窓口を通しての行政とのかかわりでしかなかった。

社会福祉協議会、鳥取県、それから近畿ブロックの兵庫のコーディネーターだけでその地域の復興、それから支援というのは賄い切れない。地域の方が自分でやっていくことであるという認識が非常に大事であるということで、町の総務課の方とか助役さんにボランティアセンターの会議に出ただけでないかという提案をして、ラウンドテーブルに着いて、社会福祉協議会、ボランティア、ボランティア団体、それから地元行政というメンツで話し合うということが大事であると考えたのが円卓会議である。

それから今回、鳥取県西部大地震ということで、西伯、米子、ほかにもボランティアセンターがあったが、その横の連携が、できていなかったというのが、悔いが残る

ところである。個人的なつながりで連絡調整はしていたが、もう土日にはボランティアが400人来るということがわかっているのに、またよそのボラセンから回ってこられることもある。4つか5つのボランティアセンターがそれぞれ横の連携をもう少しとっていただければよかったんじゃないか。

それから、NPOの団体と社会福祉協議会、行政、それから地元のボランティアが円卓会議いわゆるラウンドテーブルに着いて話すべきであったのではないかと反省は残るところである。

あとボランティアコーディネートについての課題だが、4チームの派遣だったが、第1チームが帰るときに第2チームに引き継いで帰るけれども、引き継ぎが少なかった。わずか半日ぐらいで1チームが終わって、きょうで仕事は終わりだと去っていく。また新しいチームが入ってきたら、また半日ぐらいの引き継ぎでコーディネート業務に当たるということだけれども、あつてはならないことだが、次回こういう災害派遣があれば、チームをダブらせた派遣というのも考えていきたいと思うし、地元のコーディネーターと県外からのコーディネーターとの共同というのは不可欠であると思う。

○牛 田

今のご発言に通じて、私も後方で調整業務をやっていましたが、最初の1週間というのはもう混然として混乱の状況があつて、こういう情報をもう深夜帯にやっと集約して、明け方の3時とか4時にファクスで各ところへ流すという状況であつた。

また、ニーズの掘り起こし、またそれへのつなぎ方のノウハウが、やはりまだ均等ではない。県社協の職員をそれぞれのところへ配置したけども、はっきりいって訓練を受けた職員は、うちの事務所の中にも二、三人しかいないわけで、あとの人はボラン

ティアって何者ぞというくらいの程度である。はっきりいって県社協の全体の集団の中では、ボランティアは大体よくわかってても、ボランティアの窓口としてきちんと対応できるというのはほんの数名しかいない。そういう中で、現実には県社協という組織が入っていても、横につなぐというのはほとんどできない状況が起こっていたということである。

そういう中で、県社協がこういう情報を集約して発信しても、やはりうまくボランティアと結びつかないという問題がある。

現実には日野でボランティアニュースや情報整理をやっていただいた吉川さんから、情報発信についてお願いします。

○吉川

情報発信について2つ話させていただきたい。まず、センターから外部への情報発信だが、先程、情報発信をしてもらったというようにおっしゃっていただけたが、実際にはすごく限られていて、ニュースの発行、そして住民の方々向けにピラもまいた。あとはセンターを訪れた取材陣への対応、それと鳥取県社協の方で県内の各ボラセンの情報を取りまとめて毎日関係機関に発信しておられたり、状況に応じてはボランティアや物資の支援の要請を出されていた。でも、これはよく考えてみると、センターの言葉が直接皆さんに伝わるものといえば、受けとる相手がすごく限られていたニュースとピラである。

逆に一般の方々が多く手にとれる情報というのは、言えは情報が取捨選択された後であるマスコミ報道、この2つになってしまう。これでは本当に伝えたいことが伝えたい方に伝わらなかったのではないかと思います。やっぱり現場から、現場の体温が伝わるように直接、そして広く、それからいろんな媒体を使って、それで最後に一番大事

だと思うが、連続的な情報を発信することが必要だと思った。

連続的にというのは、例えば、今、ボランティアが余りぎみですという情報がちらっと漏れて大々的に報道される。その後こちらの方から何も発信しなければ、その情報が延々と回り続けて、ボランティアはもうだれも来ない状態になってしまう。それが毎日、昨日はこうだった、今日はこうだった、明日はこうだというように発信し続け、流れのある情報を提供すれば、読み取る皆さんにも大体わかっていただけるんじゃないかと思う。

情報発信の手段としてインターネットの活用が、今の時代だから挙げられると思う。これは情報をいつでも好きな時に提供できるというメリットがあるし、見る方の数が増えるに比例して多くなる。だから、無数のファンクラブ会員のボランティア予備軍の方々や、運営にひよっとしたらヒントをくれるかもしれないブレンを本当に数多く抱えられることになると思う。あと即時性とか双方向性というメリット、こちらの方も生かしたら、待ちが基本であるボランティアセンターに攻めの要素も加えることができるのではないかと思った。小さいことだけれども、例えば今受け付けてるニーズを求人票のような形にして、これに対してボランティアを募集をするということも可能ではないか。あと、炊き出しをしたいと申し出てくださいるグループがたくさんあったけれども、日野では二、三カ所しか炊き出しできる場所がないのに、しかも同じ日に集中したりする。そうなるからだと調整も大変になるので、会議予約表みたいなものをホームページに上げておいて、この日あいてます。だれか来ませんかみたいな、こちらの方から要求するぐらいのこともしていいのではないか。

このようなことをしたかったけどもでき

なかった。技術的なこととか金銭的なことではなくて、体制的なことというか、とにかくめだと言われてしまったというのが現実である。多分だめだと言われた理由は、勝手に本部と違う情報を発信されたら困ると考えられるところがあったと思うけれども、総括的でそごがない大事な情報というのは本部で取りまとめて発信する。これはこれでいいと思うが、時事的な一過性の情報、そして現場の叫びに近いようなものは、現地の判断で随時出させていただくと割り切っていただいて、的確な情報発信ができたらと思う。

あと2つ目だが、ボランティアセンターそのものについての情報である。こちらをもう少し広く発信するべきだったのではないか。私が初めて日野町に行ったときに、ボランティアセンターって一体何、ここは何をするところ、何をす人達のいるところというのが全然わからなかった。これは地域的なこともあって、住民の方々は初めてボランティアという言葉に触れた方が多いと思う。そういう方は、やはり何なのかわかんなかったでしょうし、あとボランティア活動者の側も、震災ということで初めて思い立った方もかなり多いんじゃないか。そうすると、ここにいらっしゃる方々はみんな当然のようにご存じでしょうけども、ボランティアは善意によって無償で誰かのために活動をする人達で、困ってる人は誰でもボランティアに手助けを頼めるとか、あとそのお二方を仲立ちするのがボランティアセンターだということ、これだけのことも何か正確に伝わっていなかったのではないか。センターができた当初に、もっとボランティアの方々や町の方々、いろんな方に知っていただければ、例えば住民の方々のボランティアに対する不信感といったもの、例えば料金がかかるんじゃないかという誤解、あと他人に頼むのは遠

慮なさったりとか、恥ずかしいことのように感じられたりという勘違い、あとは残念ながら見受けられたが、業者でボランティアと紛らわしい言動をする人というのがいたが、そちらとの違いもわかっていただけたんじゃないか。

あとボランティア活動をされる方に対してだが、本当に初めて来た人というのは、どこで何をすればいいのか、何をさせられるのかわからない、でも何かここで待たされてるといふ、すごくシステムがわからないことへのいら立ちとか不安感とかが大きいと思う。ボランティアといっても人間なのだから、そのあたりのケアというか、その人たちに気遣いをするのがセンター側でありコーディネーターであると思う。例えば何か派遣先でトラブルがあったらすぐに聞いてあげるといふことが必要であろう。

あと、これはあわよくばだが、長期的に活動をしていただける地元の活動者も、確保できたかなと思う。早い時期からセンターはこんなところだと、ボランティア活動というのはこういうものだ。震災救援のボランティアだけではなくて、平時にもお互いが助け合えるシステムとしてのボランティアが続いていく必要があると思う。でも、多分、町民の方は地震で大変だったので片づけにはあっと来てばあっと帰っていった、何か一時の流行のように、もう既に思われているのではないか。だから、そういうものではないというアピールもしておくべきだったのではないか。

○牛 田

私どもも万全を期して対応したようには思いながら、実際、最初の10日間というのはどう展開するかともう全然わからないで、手探りでやっていたという状況です。とにかく物量作戦で、とりあえずコーディネーターを大量に放り込めば何とか経験のある

人がやってくれるだろうというような感じでやっていた。

吉川さんから、早い時期にインターネットを活用してはというご提案があった。インターネットのホームページ立ち上げることについては、はっきり言って費用が相当かかるということを従来から我々は思っており、立ち上げることの必要性は感じながらも、この急場のしのぎになるのかということがあり、現場でそれで手つけるのはいいけども、後始末をどうやっていくのか、またそれを活用するための後のスタッフの育成ができていないままいかがなものかと感じた。確かに吉川さんは、パソコンのプロで、自分でホームページをつくられる方だから、もっとそれを早い時期に知っていれば違う対応もあったのかなと今になって思っている。

そういうような状況の中で、情報がひとり歩きするということは大変怖いことである。もう風評というか、ちょっとマスコミの記者への対応が悪いと、すぐ新聞紙上では対応が悪いと、翌日には書かれてしまう。

先日も内閣府の災害ボランティアを考えるとこの集いがあるって、私も中央に行って各災害地の人や全国的なNPOのネットワークの方たちと2日間にわたって話をしてきたが、その中で一番怖いのは、やはり情報をどう管理するかということである。ボランティアが勝手にやってるから勝手に何を言ってもいい、やってもいいということではないだろう。やっぱりこれからはしっかりした、ある程度緩やかなネットワークだけど、お互いに良識の中でこういうことはやっていいけど、こういうことはやっぱりやめた方がいいというようなこと。

・また基本はやはり地元主義を徹するべきで、外から入っていった者はやはり地元の意味を尊重してきちんと対応しないといけない。外の者がやいやい言ってするもんで

もないだろうと。ただ、地元の方たちにはやはり経験がない。そういう点での経験をきちんとつなぐ、またボランティアに頼んだ経験も含めて地域おこしを、その後継続しなければならないという課題がある。その辺も含めて、これからのボランティアセンターをどうしていくかということが重要だという話が出ていた。

余り時間もないが、今までの話の中で気づいたり感じられたことの中で、何かちょっと今日ここで言っておきたいことや質問してみたいということがあればお受けしたいと思う。

○会場参加者（鳥取県外）

日野町には、地震直後からずっと関係しており、月1回ぐらいずっと出入りしている。私が見た立場から少しご提言したいと思う。

昨日、今日のフォーラムをずっと聞いていたけれども、私も神戸の震災というのは経験しているが、フォーラムの趣旨として、神戸の地震の教訓が今回活かされたかということに焦点が集まってるように思うけれども、ケースが大分違うと思う。神戸の場合は死者もたくさん出たし、大都市で起きたということがあったけれども、今回の場合は幸い死者が出なかった、それで非常に行政もスピーディーに対応した、しかも地震の中心地が非常に過疎地であった。そういうことで、何となく全体的な雰囲気として、今回のフォーラムが反省会として、よかったよかったというようになりかねないような気がするけれども、日野町のケースを見ていると、神戸の地震の教訓が全然反省されなかったというのか、視野に入らなかった問題がたくさんあると思う。

そのまず1つが、県社協と日野町の社協の連絡体制が非常に悪かったんじゃないか。これは日野町の問題ではなくて、いわゆる

過疎地であって、20代、30代の方が極端に少ない地域である。そこに日野町がしっかりしなければできないんじゃないかということ自体が無理じゃないかと思う。しかし、そういう状況の中で県の社協なりがとにかくもっとリーダーシップを発揮されて、ある程度までは県社協の方が担うべきではなかったかと思う。

それから、地元の瓦れきの整理でも、地元の地理に詳しい人が全くいなくて、我々も右往左往したが、ああいう時でも避難所に行ってみると高校生とかが遊んでいる子も多かった。高校生とかを少なくとも利用して地理の案内とかをしてもらうことはできたんじゃないだろうか。特に20代、30代が少ないわけだから、高校生ぐらいは利用してもよかったのではないだろうかと思う。

それから、県外のボランティアの受け入れ体制だが、とにかく神戸とかのことで余りにもたくさんの方が来ると混乱するんじゃないかと。それで、受け入れる旅館やホテルが日野町には少ないから無理だろうというので、初めから受け入れ拒否というのか、来てもらっても困るんですという色彩が非常に濃かった。そういうときに、どこで寝泊まりしても構わないとほとんどのボランティアの方は思っていると思うので、もう少し何とかならなかったかと思う。

それから、社協の方へのご要望というのか提言であるが、ボランティアセンターの現状をずっと見てるけれども、実際には松田さんお一人に随分負担がかかって、しかも震災直後から現在まで1日も休みをとらずに仕事をされている。松田さんが担当の課の方だったらまだわからないことはないけれども、センターの所長であり図書館長である。そちらの機能はストップしながら、ずっとボランティアセンターの方にかかわってらっしゃるけれども、いつまでもこれが続くとも思えないし、そういう面でもう少

し日野町全体として、とにかく人も足りないお金も足りないという、そういう状況なわけだから、やはり社協の方から手を差し伸べられるべきではないだろうか。実際には臨時職員として3名いるけれども、神戸の場合でも非常に後のケア、地震直後の瓦れきの整理だけではなくて、特にお年寄りが多い地域だから、今後容易に想像できるのは、ケアが不十分であれば、例えば孤独死が起きるのではないだろうか、あるいは、短期的には人口が減らなかったかもしれないだろうけども、春になるとどっと人が出ていくのではないだろうか、予想できる。だから、そういうことのケアをするためにも、臨時職員だけではなくて、やっぱり1年なり2年なり、地元の体制が整うまでは県の社協の方で対応される必要性があるのではないだろうかと思う。

それから、肝心なこととして皆さんの議論の中に出なかったので、口はばつたいが、私の方から言うけれども、ボランティアセンターの資金。義援金というのは大抵被災された方々の方に回るから非常に助かるわけだけれども、実はボランティアセンターというのも特別な予算措置がないので全くお金がない。当初は町の方としても何とかされたと思うけれども、被災されている町だから全然お金がない。だから、ボランティアセンターの運営資金についても、もう少し長期的に、あるいは短期的に、当座のことでもそうだけれども、忘れてもらっては困るのではないかなと思う。

○牛 田

県社協の対策本部を立ち上げるに当たっては、ナホトカの重油災害のときに鳥取県にも義援金というか活動支援金というお見舞い金が入ってきた。その金を漁民の皆さんや動いた方たちの経費として分配した後に、600万余りの金が県に残ってしまった。

それを県社協のボランティア基金に臨時費的に積み立てておけということで、県庁の方から移管を受けて、県社協ボランティア基金の中に600万持っていた。それを今回の災害には取り崩してもいいんじゃないかという執行部の判断があり、牛田、この金の範囲の中でやれる限りのことはやってみろということで、一応資金を私の管理に移していた。

できることはもうとにかく即断で使えと現場には言っていたが、日頃から一々伺いを立てて使う癖が社協の職員はあるから、思い切って金を使うということではできない。役所的に伺ってからでないといけないのかなあ。この急場のしのぎにどうするんだみたいなことが実際はあった。特に若い職員たちには、本当はもっと即断で何とか出してくれたらいいんじゃないのという思いは最初の数日間あったんじゃないかと思うが、そういう資金がありながらも、なかなかちゅうちょした。どこまで使っているのか、どういう目的なら使っているのか。経験的に使わせてもらったこともないので、後で役所に事後報告したときに、しかられない範囲の使い方ではないといけないとか、こういうときにボランティアの飲み食いに使うというのはどうかなあとか、いろんなことを考えた。遠方から駆けつけたボランティアに飲み水もご飯も全部自分でというのもちよつといただけないところもあった。行政に言っても急場のしのぎでは買ってもらえないものもあった。だから、私が日野に行った時は、長ばしごが折れたんで、もう道具がないと屋根に登れないわけだから、もう即断で、街にある長ばしごが2台しかなかったけど、それをすぐ買ってこさせた。このようにやはりボランティアセンターが活動する上ではお金が要するというのはわかっている。

全国社会福祉協議会が各県、各市町村の

社会福祉協議会から拠出を受けて、この災害時のための活動資金の積み立てをやっている。その中から全社協を通じて、私どもの方にも100万おりてきた。有珠とか、ああいうところには200万、300万とどうも行ってるようだが、災害規模を見ながらということだったと思う。一応、最近あちこちのところボランティアに対する活動援助資金が要るということで、いわゆる罹災者への義援金とは別に資金をくださるところが最近は出てきて、そういうお金も含めて鳥取県社協は、随分資金的には潤沢に今回の活動展開をできたが、永続的に、さっきご提案があったように、日野町において県社協の職員を出向させということになると、ちょっと今私もお答えに窮するところがある。

○会場参加者（鳥取県内）

いろいろなボランティアについて聞かしていただいたけど、私もいろんなボランティアをさせてもらっているし、これからもいろんなボランティア、例えば災害ボランティアばかりでなくて福祉ボランティアも、いろんなことをやりたいと思うが、行き着くところは、もし事故が起きたら誰が責任をとるかということが出てくる。これらの点はこの西部地震などに事故はなかったのか。もしあったとしたらどういうぐあいに処理されたのか、その辺をお聞きしたい。

○牛 田

ボランティア保険というのが昭和52年に全国社会福祉協議会が開発して、今日に至っている。この保険の中にはいろんなオプションがあるけども、本来はボランティア活動をされる前日までに登録をして、お金を前日までに払い込んだ方が翌日の午前0時から保険適用になる仕組みである。

平時はそれでいいわけである。だけど、

災害時になると全国からどっと人が来て、その場でもう活動されるので、そこで掛金を払っても翌日しか意味がない。帰った後に保険がきいても意味がない。これは、実は一昨年ほどから全社協が災害時特別対応ということで例外規定を設けて、今は即日、災害時においては即日受け付け即日適用ということをして可能としている。ですから、今回の災害に当たっては、役場というか社協、災害ボランティアセンターに来た方を登録して名前を書いたら、自動的に役場の方が掛金をプールするという約束を取りつけて、そのためにはきちっとボランティア活動者の住所、氏名、電話番号、これはきちんとかわかってないと、後で災害の補償ができない。実際、私が承知しているだけでも六、七件あった。ガラスが落ちてきて切れたとか、重たいブロックで骨折したとか。それからこけて捻挫をしたとか、随分あった。やはり危険箇所に入るの。そういう事故が現実起こって、これに関しては現在保険請求中なので、ほぼ100%おりるだろうと理解しておる。

こういうことはお金で一応解決つけるしか方法がない。一応このような対応になっているということでご理解いただきたい。

○会場参加者（鳥取県内）

私は、米子こども劇場の事務局長をしている。

私たちこども劇場というのは、親と子供が一緒になって、主な活動は生の舞台を鑑賞する活動である。これは全国にたくさんの仲間がいる。神戸の震災のときに生かされたと思うことの一つは、その全国の仲間から鳥取県どうだったかという連絡がすぐに入り、こども劇場の事務局の屋根がずれて雨漏りがしてるとか、会員さんはどうだったとか、いろいろ尋ねてくれた。現状を報

告した。そして、日野町とか、確かに死者は出なかったけれどもということをやったら、皆から応援の義援金を送ってこられた。それで、鳥取県内には4つの劇場がある。4市にある。

そこで、私たちは仲間で鳥取県協議会をつくって、ここが窓口となり、この全国の仲間から送られた義援金をもとにしてファンタジーボックスという会を立ち上げた。これは何をするかというと、私たちができることは何かと考えたときに、私たちは屋根に上がることもできない。だけど、私たちにできることは、子供たちやお年寄りたちと一緒に楽しむこととか、いわゆるみんなが忙しくってどうしても置き去りになってる子供たちのケアとか心の寂しさとかを埋めることは私たちにできるのではないだろうか。それから、今度は劇団とか、いろんなプロ、アマ問わずみんなに呼びかけて、日野町を初めいろんなところに行った。人形劇とか、コンサートとかいろんなことをした。その義援金というのが全国から150万円以上集まったと思うけれども、これをもとにして被災地の皆様のところにチャリティーコンサートとか人形劇を持っていっている。ただ、このお金がなくなったときには、私たちは幾らしたくともお金がない。だから、私たちのこのファンタジーボックスというのがよく新聞紙上にも紹介されているので、皆さんからの義援金をもとに、これからも息の長い活動をしたいとは思っている。本当にお金って大事ななあ、何かするにはお金が要る。だから、皆さんに、派手なことはできないけれども、地道に子供たちに工作教室をしたりとか人形劇をしたりとか、それから本の読み聞かせなどをやっている。これも私なんかは神戸の震災が生かされた活動だと思っている。

それとまた、こども劇場は米子市のいろんな協議会に入っており、ボランティア協

議会に入っていたことが今回のこの活動をスムーズに動かしたことのひとつではないかなと思っている。

これを機会にNPOというのをすごく見直されているし、私たちこども劇場もNPOについてはいろいろ勉強会を重ねてきたので、これをきっかけにきちんとした形でNPOというものを取り組んで、本当に何かあったときのために、慌てるんじゃなくて備えを常にしたいなと思っている。

皆さんもファンタジーボックスが目にとまったら、どうか声をかけていただきたいし、それからこども劇場の応援もしていただきたいと思っている。それがひいては子供たちやお年寄りや、そしてもちろん私たち大人も和み、これからの活力につながるんじゃないかと思っている。よろしく願います。

○牛 田

こども劇場さんをご指摘になった点だが、実は神戸元気村が6日の夜には鳥取県へ入ってきて、かなり長期にわたって下榎を中心にして活動展開していただいた。

1週間くらい経たころでしょうか、ボランティアは元気村以外だれもいないというような記事がある新聞社から出た。けど、隣の集落には100人くらい私どもがコーディネートしたボランティア入ってるから、変な話だなあということも思った。毎日毎日神戸から来たボランティアがと、やはりフレーズとして大変いいのでしょう。マスコミ受けがして、神戸の経験した人たちがここでもう一度恩返しをしているというのが絵になると思ったのかしれないが、某テレビ局は毎日そこばかりを常設テレビカメラを置いてやってる状況があった。その結果としてどういうことかという、最初の1週間くらいの間インターネットにこの災害情報を上げてたのは元気村しかいなかった。

ですから、吉川さんも元気村のインターネットを見て、ああ、日野が大変なんかと思って来たという。それ以降である。県のとりネットに載せ始めたのは。私どももNHKボラネットというのが記事提供すれば載してくれるというのを知っていたから、2日目の朝方からはNHKボラネットに情報を上げた。けど、我々が出す情報量よりも元気村がどンドンどンドン、あっちからこういう炊き出しやるから金、物、人をくれという応援メッセージの方が強く前へ出て、我々の情報発信は具体性に弱いというご指摘があった。現状報告だけじゃないか、もっとリアルタイムで欲しいものを即座に言った方がいいんじゃないかというご指摘もあったが、一方で、今のNPOとかNGOの運動というのは、元気村が全国区展開だけでなく、最近カンボジアの地雷撤去まで行ってるそうだが、そういうことをやられる資金というのは、全国に自分たちが情報発信して、ここに具体的にリアルタイムでこういうふう活動やってる、メンバーを送ってるという姿をマスコミ情報や自分たちの自前の情報源の中で全国区アピールされる。その資金が結局、元気村の専従の十数人の人件費に当たって、活動資金でもあるけども、当然その専従者の人件費に充当される。そういう世界的に見ればNGO、NPOの活動のやり方として、手法としてそういうものがあることは承知しているが、なかなか地元の組織がそれがやれるかというやりにくい点があって、全国展開やってる組織だからこその機動性かなとも思いながら、いろいろ考えたところはあった。

最後に皆さんからご発言いただいて、まとめにかえたいと思うので、別所さんからお願います。

○別 所

私のレジメの一番上に実は書いてある、

これを言うのを忘れていた。災害ボランティアセンター立ち上げは、ボランティアのことはボランティアで始末するとの基本姿勢があるボランティア集団が必要だと。ボランティア、ボランティアと言ってるけども、ボランティアをコーディネートするボランティアが必要なんだということである。それがないとボランティアセンターとしての機能は果たせないだろうという気がしている。気がしているというより事実そのとおりだと思っておる。

ボランティアを、その町でなぜボランティアを養成しておかなければならないか。これは、一番下のところに実は書いてある。米子の場合でも580人のボランティアが参加している。日当換算すると、1週間で1,0000万円ぐらいになる、580人雇う計算すると。それだったら前もってボランティアをたくさん養成しておいたほうがいい。どれだけ安上がりか、ということをおきたい。

○牛 田

ありがとうございます。

続いて、高橋さんお願いします。

○高 橋

災害というのは本当にいつ起こるか、またどれぐらいの規模で起こるかというのは、学者さんの中ではある程度予測されてるらしいけども、わからない状態で、今もどこかで案外起きてるかもわからない。

やはり備えという部分が大事になると思うので、経験された方はまた考えられるとは思いますが、経験されたことのない方は、ぜひ備えるということで、いろいろ自分の身の回りで準備されたりとか、そういったネットワークをつくられたりとか、そういったことをされてみてはいかがでしょうか。

○細 田

きのうの基調講演、全体会議を聞いていて、鳥取県の方では昨年、防災機関連絡会議という消防とか自衛隊とか警察と行政との連絡会議をやっていたので、今回非常にうまくそれが機能したといったようなことがあったが、やはり先ほども申し上げたが、ボランティアというものが神戸の震災以来、災害時にはいろんな役に立ってきている実績もあるし、これからますますその可能性も広がってくると思う。ぜひこれを今後何か起こったときに役立てるように、あらかじめ行政の組織の中に、不確実な団体ではあるけども、より確実なものとして取り入れるために体制をつくるなり、先ほど会場から資金のご意見もあったけども、ボランティアセンターの実際の運用資金をどうするのかといったようなことをあらかじめ行政が中心となって体制をつくり上げておく必要があるのではないかと考えている。

○松 田

先ほどいろいろフロアの方からも発言していただいているけれども、今、日野町のボランティアセンターとして一番問題というか、課題になっているのが、今後の災害ボランティアセンターをどうやっていくかということである。このフォーラムは、もう一応一区切りしたから、今回の震災についてももう1回振り返ろうという形かもしれないが、日野町の災害ボランティアセンターはまだ終わっていない。

それで、私もこのフォーラムのパネラー紹介のところには、現在もボランティアセンター運営スタッフとして従事というようになっているが、実はもう11月15日で災害対策本部から復興本部に変わっていて、もう私のいるところは本当はないわけである。だから、もう本来の業務に戻っていて、図書館の仕事をし、またホールの復興イベン

トをいろいろやっているけれども、そういう仕事がもう既に入っている状況である。

だから、そういう状況の中でどうやって災害ボランティアセンターを町として引き継いでいくか。今、町のボランティアセンターというのがもともとなかったが、それをどうやって立ち上げて、地元の町のボランティアを育てていくかというところがとても課題だと思っている。

ここにも来ていらっしゃる方の中に、町内のボランティアとして一緒に運営にかかわってくださった方とか、コーディネーター部分で入ってくださった方も何人かおられるが、いろんなボランティア団体が町内にもあることはあるが、それをどうやってつなげていってネットワーク化していくかということが今後の課題になると思う。それをするためには社協がこんなことをやっているということをどんどんPRすることがとても大事なことだと思うし、町民を社協の味方につけるということを今後どんどん考えていかなければならないと思っている。

それから、行政としては行政の窓口を明確化するということである。一応、災害対策マニュアルというか、文書の中には担当課はどこだということを書いてあるが、今回それは少しも機能していなかった。そうしたところを、命令系統を確認し合って窓口を明確化して、今後、何かあったときには備えるということがとても大事なことだと思っている。

○福 島

我々県外の人間の役目はもう終わった。これから日野町、それから、以外の鳥取県西部の各町の方々の復興は、皆さんの住民、市民、町民の手によってなされるものであり、よそから来た者がするものではないと思っている。先ほど井上先生がおっしゃっておられたように、社会福祉協議会だけじゃ

なくて、住民の活動、市民活動が中心になって自分の町を復興へと、それから過疎化から守って人口の流出を防いだりと、自分らの手で自分たちの地域をつくっていく、守っていくという活動に変わってきていると思う。

○吉 川

今、福島副部長もおっしゃったけれども、もう地元の手に移す時期である。私も11月の後半に神戸の方に戻るときに、私はもう二度と来ない、皆さんでやってください。もし今後私が来るとしたら、それは単に一般の作業ボランティアとして来るからよろしくと言いついたが、私はいまだに運営の方にまで口を出す小姑のような状態になっている。それはもう一重にボランティアセンターの今後が、松田館長がおっしゃったように、まだ不明確な状態にあるというのもあるが、ちょっと人材の方に不安というか、スタッフの方に行動力とか企画力、そういうものが要求される時期なんじゃないだろうかと思うが、どうもまだ日野のボランティアセンターは待ちの姿勢を続けていて、もう週に1回か2回活動があるかないかというような状態を続けている。このままでは本当に心配で心配で、今回ももう神戸に帰るのをやめようかと思うほどなので、地元の皆さんも、スタッフの方に頑張ってくださいのももちろんだけでも、地元のこのようにたくさんボランティアに興味を持ってくださる方がいらっしゃるのだから、ぜひ日野のボランティアセンターを助けていただきたい。お願いいたします。

○牛 田

本当に身内のような気持ちで支えていただいた。

もう時間もこれでおしまいとしなければならないが、もう過去のことのようにつ

ておられる方たちが県民に多くあります。けれど、まだ本当に終わったわけではなくて、これからまた逆に、はっきり言うと鳥取県でボランティア活動というのは実際は根づいていない。個々の住民の皆さんが何らかの意味でだれかの支援を必要とするときに、素直に手を挙げて、だれか助けてと言えない県民環境である。個別の方たちからこういうことを頼めないかという話がボランティアセンターにはほとんど入ってこない。そして、社協のボランティアセンター、コーディネーターが何をやってるか。食事サービスグループのお世話やイベントの企画、それに終始しております。

本当の意味で困ってる、困ったということ素直に受けとめて、じゃあそれに応援できるボランティアがいつもいるよ、だれか探すから必ず解決つけようねと言えるようなボランティアセンターの役割が今発揮できてないことに、もう一度我々の責任を痛感する。

そういう意味でも、今日お集まりの皆さんは災害時だけじゃなくて、日頃から本当に、災害弱者と言われるような方は、やはり行政が全部見るというようなおんぶにだっこの時代ではない。介護保険のように、自分で自己責任、自己決定する時代に入ってきている。それは行政により援助、サービスを使うということもあるけども、自分の身の回りの人たちに自分の困ったことを素直に表明して、素直に人の親切を受け入れられるような人間関係や地域関係をもう一度構築することでもあろうかと思う。そういう意味で、本日お集まりの皆様には引き続きボランティアに関して各方面からいろんなご意見、ご協力を賜ればありがたいと思う。